

一、先師鳩巢手書二紙進呈仕候處、應御意御笑留の旨、本望の至奉存候。文集首卷入御覽候處、兼て御懇望の儀に付御手寫被成候て、追て可被反下旨承知仕候。湖亭隨筆・庶物類纂等の序御覽被成候。大學新疏等にて、鳩巢經義に委くいたし候を御敬服被成候由。乍恐御具眼の程御頼母敷事に奉存候。太極圖述・論語廣義等も撰述仕候。刊行には不及候。一、大地昌言事申上候處、兼て御聞及被成候。此者の詩文も御覽被成度候旨、則近作の詩別紙昌言に爲相調入御覽候。文章も少々御座候へ共、此節紛冗清書も難仕候。幸祭鳩巢一文一章有之、東都諸門弟及私共迄も、追挽仕候一小冊御座候に付、不取敢入御覽候。文學の大抵御察知にも可罷成やと奉存候。此一冊・文集首卷一冊當地へ迄被反下候とも、私東行の後、誰可致照納様も無御座候條、若し前田信濃守殿御心安被仰通候事に御座候へば、此御方迄被遣候はゞ、私事御存知御心安程にも、先年以來被成下候間、御疎略なく於東都御傳達可被下と奉存候。左も無御座候はゞ大森へ被仰付、寡君邸内私方へ相届候様に可被爲成候。疎末成事は仕間敷候。

一、稻氏類纂於其表、御存知之醫家に少々有之御覽被成候由。松岡玄達にては無御座や、此者は餘程秀出の才と若水も珍重がり申候。白雪樓集伊藤齋宮作と申儀御承知被成候。是は御覽不被成候。若刊布も仕候や如何と被仰下候。私事同郷の好のみならず、殊に韓客の時分私の了簡を以て、東西扈從も爲致候程の儀に御座候。然共終に右集録見申事も無御座、書名さへ此度初て承知仕事故、如何共難申上候。疎慢の至と可被思召候。猶奉期後問の時候。此等の趣宜預御披露候。恐惶頓首。

六月廿九日

青地藤大夫 禮幹

田中 左膳殿

一、深山壺峰望富嶽の詩二首  
 西嶽嶮峻天一方。雲連茵苔望茫茫。三才積氣成奇象。萬仞層巒轉太陽。烟鎖神人金虎嘯。雪餘玉女素霓裳。文辭對此生豪宕。頓教胸襟似子長。  
 西嶽芙蓉色。千嶺鎮海東。巨靈邀赤日。大塊逼蒼穹。八圍長看雪。萬家每畏風。何時尋白帝。跨鶴入僊宮。  
 一、榊原式部大輔隱居被仰付候事

播州姫路城主榊原式部大輔政岑甚不行跡に付、寛保元年辛酉十月十三日隱居被仰付、嚴敷仕置可申旨、分て被仰渡有之候。如左。

榊原式部大輔

不行跡の儀被聞召候に付隱居被仰付候。急度相慎可罷在候。

式部嫡子 小平 太

式部大輔不行跡の儀被聞召隱居被仰付。家筋思召候に付其方へ家督無相違被下候。追て所替可被仰渡候。

榊原 小平太

右勝手次第出府候様可致候。

榊原小平太 家老

式部大輔儀隱居急度慎可罷在旨被仰付候。小平太儀幼少未出府も不致儀候間、家老共申合萬端相慎、諸事入念可申付候。在所家老共にも諸事入念相慎可申旨、口上にて被申渡候。

右大目付稻生下野守・甲州勤番能勢因幡守式部一家。西丸御廣式御用人榊原七郎右衛門式部一家。小十人頭榊原大膳式部一家。

右四人十三日御老中列坐、本多中務大輔御書出を以て被仰渡。四人の衆即刻式部大輔宅へ被罷越、右の趣被申渡。畢て登城御請被申上候。

式部大輔道中より氣色相滯逗留も有之。十月十一日夜參府有之。其段以使者御用番迄御案内有之候。

榊原へ仰渡の趣、右の通世上専ら申傳候。實の御書出には亂心と被思召候故、相續の儀は無相違被仰付候旨被仰出、則於御城御立致拜見候旨、御申聞候人有之に付、亂心へは相續不被仰付御定に及承候。如何の儀と相尋候處、近年御僉義有之、亂心と申物も畢竟病氣と被思召候由にて、御醫師中へ御尋有之、橋宗仙院を始め皆々心疾より起り狂亂仕候。畢竟病氣の旨申上候。依之近年亂心一通りにて因果候者へは、家督を被仰付候。無子者は其頭願次第被仰付候。此儀は末々記之候。此度亂心と被仰立、無相違家督被下候儀は、御老中の内本多中務大輔殿被申上候は、榊原事は格別の家筋御代々御傍にも罷成候。何とぞ無相違家督相續被仰付候様に仕度ものに候。私家も先年吉十郎幼少の時相果候て御大詰故、假令家名は立候ても一萬石計可被下候處、其時分